

河口慧海著『正眞佛教』直筆原稿について

客員研究員 飯塚勝重

二 直筆「原稿」の確認

この度、東洋大学図書館に河口慧海著『正眞佛教』（古今書院・一九三六（昭和一一）年八月刊）にかかわる著者の直筆原稿およびこれに関係する書簡類数点が納められることになった。明治中期、当時のチベットへ正しい釈迦の伝記と仏典を求め、苦難の旅を続け、『西藏旅行記』の著書によって一躍有名になった河口慧海は、哲学者井上円了が創設した哲学館に学んだことでもつとに有名であった。超人的な実践と学究によって日本チベット学の第一人者となった河口はその晩年、僧籍を脱し、さらに一九二五（大正一五）年には還俗を発表した。同年九月刊行した『在家佛教』（世界文庫刊行会）は、河口自身の深く内省する魂の叫びであるとともに、当時の社会に向かって佛教の本義に帰るべきとする警告の書でもあった。河口がさらにその主義、主張を深め集大成した著作こそが『正眞佛教』であった。その直筆原稿の所在がわかり、筆者に紹介の労を取られたのは畏友神田神保町・三茶書房社主幡野武夫氏（法学部・昭和四三卒）である。

平成二二年四月末、たまたま同書店で河口の著書を手にとられていた婦人が、自宅に河口ゆかりの原稿があるとの話がきっかけであった。

なお、文中に河口慧海の名が多く出るが、特別の場合を除き、尊敬を込めて、単に河口と略称したこと、また文中に出る多くの方々についても敬称を略させて頂いたことをあらかじめお断りしたい。

紹介を受け、直接連絡を取ったのは、神奈川県藤沢市の片瀬海岸に住まわれる小山田知子さんであり、ご自宅に長く「原稿」を保存されているとのこと。直接お伺いしてお話することとしたが、その直後は筆者のかかわる他の業務に忙殺され、正式な訪問は八月の半ばとなった。猛暑の中、小田急の終点江ノ島で降り、閑静な住宅街の中にある一軒にお訪ねした。

当日、小山田さんは、母の佐伯まさ子さんと一緒に迎えてくださり、残された河口ゆかりの品々を手元にして、お二人から河口とはどのような関わり合いがあったかなどを詳しく伺うことができた。

当日、筆者が手に行きかけたのは、標題の河口慧海直筆「原稿」および六種類の直筆書簡と三種類の関係する書簡類であった。河口の書体はその容貌・風姿から想像できるように力強く、一字一字柵目を刻むように書き込んでいく字体であり、毛筆書簡も、一、二慣用的崩し字を除き、平明である。原稿および書簡は一目して河口直筆と確認できた。今、それらをまず簡略に紹介し、なぜそれらを小山田家が保管しているのか、順次その経過をたどっていききたい。なお、小山田知子さんは画廊「湘南くじら館」の共同経営者でもある。

三 残された原稿・書簡類

河口の著作については、各単行本のほか、うしお書店が編集した『河口

慧海著作集』全一七巻および別巻三巻（後、全集と改題）（後DVD-ROM版刊行）および大正大学付属図書館所蔵河口慧海貴重資料を網羅した『河口慧海全集』補巻四巻（平成二二年一月第一巻刊行）がある。

こうした膨大な著作物の中の一冊が『正眞佛教』である。

なお河口の評伝・業績研究については、多数ある中から次の優れた3点をあげておきたい。

河口 正『河口慧海』（昭和三六年・春秋社）

高山龍三『河口慧海——人と旅と業績——』（平成二一年・大明堂）ほか

奥山直司『評伝河口慧海』（平成一五年・中央公論新社）

河口慧海原著

『正眞佛教』〔古今書院刊・一九三六（昭和一一）年八月一〇日発行〕

本論全478頁（33字×12行、頭注付）

復刻版

うしお書店・平成二一年二月二二日刊「河口慧海著作集『第四巻 正眞佛教』」〔古今書院刊・一九三六（昭和一一）年八月一〇日発行〕付『正眞佛教解題』（資料提供 宮田恵美氏所蔵『正眞佛教』・著者直筆書き込み文）解説「慧海仏教学の成立」奥山 直司

『正眞佛教』（日高彪校訂）『河口慧海著作選集』〔慧文社二〇一〇（平成二二）年八月刊〕

これらの著書刊行の元になったのが今回紹介する河口直筆原稿であり、

これを証拠づけ、さらに著述の動機や経過が明快に判明する書簡が以下に紹介するように保存されていたことは、筆者ばかりでなく河口学研究者にとっても大変幸いなことであった。

（1）南・小山田家保管・河口慧海直筆原稿『正眞^マ佛教』

構成

全体が5個に分割され、二つ折りされた目次を除き、右肩を木綿糸で綴って止めている。各綴りと用紙の型は次のようである。

- 1 正眞佛教序文 20字×10行（頭注用余白付） 39頁
（佛教専用会翻訳部用紙）
- 2 正眞佛教目次 25字×24行 25頁（銀座伊東屋製用紙）
- 3 正眞佛教第一綴 20字×10行（頭注用余白付） 227頁
（佛教専用会翻訳部用紙）
- 4 正眞佛教第二綴 20字×10行 276頁（同右）
- 5 正眞佛教第三綴 20字×10行 281頁（同右）

合計目次25頁 本文823頁 合計 179,600字

400字詰め合計（約）450枚 180,000字

（2）南・小山田家保管・河口慧海直筆書簡等

ここでは河口が差し出した書簡類の宛先、書状の種類等のみ順次掲げ、書状の内容については、今後の関係する行文のなかで適宜紹介、引用することとしたい。

書状1 封書（白色封筒）入り

宛先 山本氏への在家仏教著述に関する尋ね書

封筒 表「周盤雲鐘」銘青銅器形象押印

裏「右文閣」銘入り

書簡用紙 便せん1枚本文10行 ペン書

昭和一〇年三月二十二日日付あり

書状2 封書（茶封筒）入り

宛先 神奈川県鎌倉大町 妙本寺前

南文藏殿 3錢切手消印10・9・10

発信人 新潟県赤倉温泉 不知庵

河 口 慧 海

九月九日 夜九時書

書簡用紙 和紙 毛筆

書状3 封書（白色封筒）入り

宛先 神奈川県鎌倉大町 妙本寺前

南文藏殿

3錢切手消印新潟・関川

発信人 東京市世田谷区代田一丁目六三五の十一

河 口 慧 海

十年十二月八日 午後九時

書簡用紙 和紙 毛筆

河口慧海著『正眞佛教』直筆原稿について

書状4 封書（白色封筒）入り

宛先 鎌倉大町 妙本寺前

南文藏殿

3錢切手消印不明

発信人 東京市世田谷区代田二丁目六三五ノ十一号（小田急中原駅下車）

在家佛教修行團

河 口 慧 海

昭和十一年七月四日

書簡用紙 和紙 毛筆書

（日付以外は印刷）

書状5 封書（白色封筒）入り

（在家佛教修行團用封筒使用）

宛先 鎌倉大町 妙本寺前

南文藏殿

3錢切手消印新潟・関川

発信人 越後国赤倉温泉 不知庵

河 口 慧 海

昭和十一年八月十三日

書簡用紙 銀座伊東屋製原稿用紙25字×24行 ペン書

書状6 封書（白色封筒）入り

宛先 神奈川県鎌倉大町 妙本寺前

南文藏殿

3錢切手消印 1・26 后4―8

発信人 東京市世田谷区代田一丁目六三五ノ十一号(小田急中原駅下車)

在家佛教修行團

河 口 慧 海

昭和十二年一月廿六日 (日付以外は印刷)

書簡 断簡3点 河口慧海後付け(6—1) 用紙 和紙

郵便はがき1通(6—2)

毛筆書 2点(6—3・4)

出荷案内状1通(6—5)

(その他2点角封筒入り各種案内(7—1・2)については後述)

四 著作ゆかりについて 南文蔵という人

以上、紹介した河口直筆の書簡の宛先はすべて南文蔵氏に関わるものであった。これらを小山田知子さんが保管するに至った経緯にはどのような事情があったのであろうか。お会いしてわかったことは、保存された書簡類に共通に書かれる河口の宛先、南文蔵氏(一八七六(明治九)年—一九四二(昭和一七)年)のお子さん8人の三女が南まさ子さん(結婚して佐伯姓となる)であり、まさ子さんの長女が佐伯知子さん(結婚して小山田姓となる)、すなわち南文蔵氏の孫に当たる方であるという事である。

この南文蔵氏について名前を聞いた瞬間、筆者にはふと思ひあたった事があった。それは、最近惜しまれつつ終刊となった、タウン誌の草分け的存在であり、作家森まゆみさんらが編集発行していた季刊誌『地域雑誌谷

中・根津・千駄木』(谷根千工房刊)(通称谷根千)に確か取り上げられていた、明治時代東京・日暮里でネクタイ製造業を手広く始めたその人ではなかったかという事であった。

佐伯まさ子さんは幼少時代の南文蔵氏の記憶を語られ、南氏が一七歳で輸入雑貨の三枝商店から独立、ネクタイ製造を始め、後に「赤帽印ネクタイ」工場を創設、一世を風靡したが、さらに事業成功の後、経営は他人に任せ、自分は不動産業というべきか、土地・建物の設計・建築に大いに関心を注いだ豪快な人だったという。因みに、筆者はある会合で森まゆみさんとお会いしたとき、哲学館出身の河口慧海が、本郷区根津(現在東京都文京区内)の宮永町に住んでいたんですよと話しかけた事があった。これを機会に森さんは早速取材に移られ、「谷根千」(其の六十九号)に「スリーイヤーズ・イン・チベット 河口慧海と根津宮永町」(31—36頁)、「津谷明治聞き書き 根津の旦那津谷宇之助と河口慧海」(43—46頁)の記事をまとめられた。筆者は当日訪問の後、「谷根千」を見返し、「赤帽印ネクタイ—南文蔵氏を追う」(其の六十二号)、『南文蔵氏を追う』補遺・前編 父・文蔵の思い出—南あぐりさんに聞く(其の六十四号)、『南文蔵氏を追う』補遺・後編 南家の四姉妹の三編を読み返し、南家の歴史と、南氏が建てた多くの鎌倉での住宅のほか、伊東に別荘が建てられていたことを確認した。図らずも谷根千が河口慧海と南文蔵およびその一家を結びつけておられたのである。

五 河口の外護者—南文蔵氏

『正眞仏教』序文末尾に次の一文がある。

斯の如き必要を痛感せられた伊東寓居の或隠士は、若干の淨資を提供して、釈尊の本旨を詳示せんことを余に求められた。余はその要求の眞正菩提のなるを歎んで、ここに数月を費やして、行詰まれる現代我國佛教の根本的革命の基本とならん仏陀釈尊の本旨を弾明して、世に発表する次第である。昭和十一年七月十九日 東都世田谷代田の寓、在家佛教修行団にて 河口慧海謹んで誌す（一部常用漢字に直す、傍線部分は原著になし）

筆者が―線を付した「伊東寓居の或隠士」こそ、南文蔵であり、『正眞仏教』執筆のための保護者となり、チベット語辞典編纂の便宜を与えた人であった。

先に紹介した書簡類の順序とは異なるが、書状5に『正眞仏教』の完成を報じる中で河口は次のように感謝の意を述べる。（なお本稿に引く河口書状は出来るだけ原文のままとしたが、一部に限り送り仮名を増し、また字順を換え読み取りやすくしたことをお許し願いたい。）

拝啓 残暑厳しく候處貴家御一統様御清健之趣を欣賀候小生丈夫にて筆硯三昧に従事致し候間乍ら余事御放神下れ度願奉候 兼ねて出版に行き悩みを生じ居り候小著正眞佛教之義は愈々兼て申上候通り神田の古今書院より發行相成候ニ付此に一本呈上仕候 本日書留小包を以て郵送此の間到着之上は御一読なし下れ度願奉候 省みれば昨年二月より貴下の外護に依り鎌倉に四ヶ月伊東に三ヶ月赤倉に二ヶ月を費して脱稿したる正眞佛教はその後出版の引（インク）の滲みによりルビを振る）受手なきに困り居り候處

河口慧海著『正眞佛教』直筆原稿について

幸に古今書院の主人は喜んで出版致し候間大に貴下のご厚意にも報ゆるの好機會を得たることを喜び申候 此ニ改めて貴下の貴重なる保護に依て世に正しい眞の佛教を送り出すことを得たることを鳴謝奉候（昭和十一年八月一三日付）

この書状中、「貴下の外護」、「貴重なる保護」に依り出版が完成したと、筆硯三昧に過ごせた鎌倉の四ヶ月は、南文蔵の「父は鎌倉で十何件も家を建てました」（前掲谷根千其の六十四）うちの一軒であろう。

別荘である伊東に三ヶ月は、南あぐりさんの思い出として「河口慧海さんとの交流」として「父は根津に住んでいらした河口慧海さんがとても好きで、傾倒していたのですが、慧海さんがチベット語の辞書を書くというので、うちの別荘をお貸ししました。資金援助もしていたのではないのでしょうか。」（前掲谷根千其の六十四）とある。河口が根津宮永町に住んでいたのは、「雪山会」を改め「佛教宣揚会」とした大正九年から昭和二年、「在家佛教團」設立を経た昭和五年までであるが、いつ頃から伊東の別荘を借りるようになったのか始まりは不明である。『正眞佛教』著作以前にすでに西藏文典作成・清書の為にも伊東の別荘に滞在していたことが伺われる。

赤倉に二ヶ月とあるが、これは新潟県赤倉温泉の不知庵のことで、前掲書状2、3、5の差し出し地である。是については前掲奥山直司氏『評伝河口慧海』に（昭和九年）ここ何年かの間、慧海は、七月に大正大学が夏休みに入ると新潟県の赤倉に行き、一夏をこの風光明媚な高原で過ごすのが恒例となっていた。滞在先は画家松林桂月^{まつばやしけいげつ}の提供する不知庵^{ふちあん}という

二間の庵であつた。それは桂月の別荘五秀山房の杉林の中にあつて、溪流に臨み、窓からは妙高山が見えた。一方、冬休みや春休みには伊東、湯河原、大磯、千葉の青堀温泉などに掛掛け、後援者の招きで別府まで足を延ばしたこともある。目的はあくまで執筆に専念することにあつたが、温泉地が選ばれているのは、持病のリューマチや痔疾の療養を兼ねたためと思われる。」とある。河口はチベット文献の請来や著作出版の爲、決して多くはないが政財界ほかの信者・保護者を得ており、青森や岩手の温泉地にある別荘への招待も度々であつた。前掲河口正『河口慧海』（新版）285—288頁に河口と松林桂月の出会いを詳しく述べ、別邸不知庵を大正一二年大震災の明年から河口に提供し、「十五六年間に亘つて、一度も来遊せられない年はなかつた。」とある。

六 書簡にみる『正眞佛教』著作の過程

書状1について——山本安三郎氏

この書状は封筒に「山本氏への在家仏教著述に関する尋ね書」とあるが住所が書かれていない。佐伯まさ子さんは「山本のおじさん」と云つた人が居られたという。

書状5から云えば河口は、当年二月から四ヶ月鎌倉にいたという事であるから、季節外れである降雪の鎌倉から、山本安三郎へ当てて差しだそうとしていたものとみられる。しかし、なぜか住所が書かれていない。宛先の山本安三郎が河口の縁故の人が手ずから届けられる様な位置に住まいしていた為であり、それが何らかの理由で南家に残されたものであろうか。

書簡（6—2）に昭和十一年八月十四日日付、南文蔵宛の発信人 伊豆国伊東町竹影荘 山本安三郎の同封された郵便はがきがある。前掲河口正『河口慧海』（新版）に「冬は伊東の山本安三郎氏および星野花子氏の別荘（竹影荘）等信者の世話になる場合が多かつた。」（285頁）、『河口さんは伊豆伊東にある信者の居宅に滞在して居られて、（略）さういふ裸の座禅像をつくる気があるならいつでも伊東でモデルになるといふ。（略）註（1）この座禅像の写真はないが制作中を撮らせた写真があつて、その中に光太郎氏、裸体で座禅している慧海及び殆ど完成した座禅蔵が写っている。この写真の説明には「昭和十三年一月七日より高村光太郎氏原型創始、八日午前十時光氏の作成中を撮影、当時当地在住の医師山本安三郎氏の診断、身長五尺四寸（略）行年七十三歳、別邸主星野花子刀自の発企にて撮影して同刀自より贈らる」とある。」（289—290頁）

以上の通り、書状1の山本安三郎は、伊東在住で河口の滞在している信者（南家）宅とは別邸、竹影荘に住む医師であり信者であると云うことが出来る。

拝啓 当地は昨夜来降雪あり三四寸積り山河草木白衣を蒙り美（うる）はしく見へ候も寒氣甚だ厳しく今尚ほ曇天にて降雪の後らしき晴も無之候さて南氏御依頼の著述に関し研究の結果二種の腹案を得申候 一は忠実な在家仏教を解り易く注釈的に誌すこと。二は在家佛教を新たに他の方面より明かにすること。譬へば在家佛教の名を用いずして實驗佛教とか正眞佛教と云ふ表題の下に在家佛教の眞義を明かにする如きに候 何れが宜しく候やご希望あらば御知らせ下され度何れ近日南氏にも相談可致考に候 以

下略

昭和十年三月二十二日

河 口 慧 海

河口が『在家佛教』を刊行したのは大正一五年九月である。筆者は専門家ではないので著作のいきさつや社会的意義については、前掲奥山氏の解説にゆだねるとして、発刊以来一〇年を経て、さらに河口の研究は進んでいた。年来の願望であつたチベット語辞典編纂事業を念頭に置きつつ、在家佛教主張の根拠をより鮮明に国民に示す為、なお一層努力するエネルギーが高まってきた。その上、保護者南文蔵の依頼という大義名分もある。釈尊本尊主義を貫き、大乘仏教の本義を明らかにする責任を河口はいかなる手法を以て果たそうとしていたか。この時点では構想は固まってきたのではないか。

書状2について―原稿書写料

本状は日付が昭和十年九月九日とあるように、書状1から六ヶ月未満である。この年五月には『蔵和辞典』編纂計画を発表着手（前掲高山年表）とあるが、すでに新著は『正眞佛教』と決めて著作に取り組んでいたであろう。赤倉不知庵において、保護者南文蔵から原稿書写料として金百円が送金された。

拝啓残暑殊之外厳しく候處御清健之趣喜び申候 此の度御無理御願ひ申上候處早速原稿書寫料として金壹百圓也電報にて御送金下され本日午後二時三〇分到着致し候 直に関川郵便局（行程壹里半）へ出懸け受取申候 御

河口慧海著『正眞佛教』直筆原稿について

陰にて窮境助かり宜しく御礼申上候 来る十二日当地出立十四日帰京十五日自宅講演之予定に候 まず報知かたがた御礼まで 如是に御座候也

書状3について―南家へ「原稿」進呈

二月八日、『正眞佛教』「原稿」がいよいよできあがつたという知らせである。東京代田の自宅から差し出されたものであろう。決断から八ヶ月足らずで約五〇〇頁に上る著書を書き上げたことになる。南家に残された自筆原稿と比較して、本文頁の数え方は余白の取り方に依るが、序文三九頁、目次二五枚はこの書状の数字と一致する。但し、最初に書かれた「原稿からの筆写本」こそ此の度話題の南家に残されたもののようで、これを筆写完成後別の原稿が印刷用として出版社に回されたものではないか。ただし、発刊する出版社の名前はまだ出てこない。

拝啓寒氣厳しく相成候處貴家御一統様御清健之趣大賀奉り度く兼て申上候如く原稿残部之寫本は漸やく数日前出来上りそれより原稿と寫本と照合しつ、目次を調製しつ、進み候處本日只今出来上り候に付き原稿分本文六百九十一頁と序文三十九頁と目次二十五枚（二十四行 二十五字詰）お渡しする運びになり居り候御都合にて貴下の使者を御送り下され候はば御渡し可申候 遅れても宜しく候ハば小生十七八日頃伊東へ来る途中持参致しても宜しく候 尚ほ一度書くことの出来ないものに候へバ大事をとり確かに御手元につく様に致したしと願ひ居り候間右何れとも至急にご返事下され度先ハ取敢ず要件のみ申上候也以上

書状4について―出版者決まる

せっかくできあがった原稿もすぐには印刷されなかった。出版者探しに手間取ったのである。しかし、間もなくそれも解決した。次の書状は昭和十一年七月四日付であるが、その二ヶ月前に古今書院に決まったという。

拝啓 梅雨も漸やく晴れんとする折から貴家御ご一統様ご機嫌好しく候や御尋ね申し上げ候 此春以来蔵語文典清書のため甚だ多忙に打過ごしお尋ねも申上ず失礼致し候 兼ねて御厚意に出来上りし正眞佛教も善き出版者を得て只今出版の爲活字組み立て中に候 先々月より始め本日までに百七十六頁まで初校正は了はり候 此の調子にて進めば九月頃にハ出版發賣の運びに至るべしと存じ候 書籍は予定の在家佛教よりは百頁あまりも多くなる見込み二候 右の次第にて難産なりし出版も愈々確実に出ることと相成り候間乍ら余事は安心下れ度候 出版書肆は神田駿河台二丁目の古今書院にて地理文学の書類出版を専門にしてゐる堅固なる本屋にて候 先ハ御不音を謝し御報道まで 如是ニ御座候也 敬具 七月四日

書状5について―苦心の末、『正眞佛教』完成(前半部分再録)

拝啓 残暑厳しく候處貴家御一統様御清健之趣を欣賀候小生丈夫にて筆硯三昧に従事致し候間乍ら余事御放神下れ度願奉候 兼ねて出版に行き悩みを生じ居り候小著正眞佛教之義は愈々兼て申上候通り神田の古今書院より發行相成候ニ付此に一本呈上仕候 本日書留小包を以て郵送此の間到着之上は御一読なし下れ度願奉候 省みれば昨年二月より貴下の外護に依り鎌倉に四ヶ月伊東に三ヶ月赤倉に二ヶ月を費して脱稿したる正眞佛教はその後出版の引(インクの滲みによりルビを振る)受手なきに困り居り候處幸

に古今書院の主人は喜んで出版致し候間大に貴下のご厚意にも報ゆるの好機會を得たることを喜び申候 此ニ改めて貴下の貴重なる保護に依て世に正しい眞の佛教を送り出すことを得たることを鳴謝奉候

次に是の如き主旨は成る可く廣く世に知らしめたく願ひ居り候ニ付貴下之知合ひにて御求め下れ候ならバ結構之事と存じ候 猶ほ貴下にして何かの贈物の代(インクの滲みによりルビを振る)使用下れ候ハバ一舉兩得の義と存じ候 此上製上紙の分は特に小生より注文して製作せしものにて一本金貳圓五十錢宛ニ候間御入用之節は何本にても宜しく候間小生宛にお申込下れ度御依頼申上候 先は呈本まで 如是に候也

昭和十一年八月十三日

本稿最初に引いた書状5の続きは出版の喜びもさることながら、河川のチベット学成就にはさらに厳しい財政上の問題も迫っていた。『チベット語辞典』の編纂である。資金はいくらあっても足りない。『正眞佛教』上梓と同時に少しでも多くこれを売りさばき、次の資金をつくること、その為には河川の唱えるウパーサカ(在家仏教)の道が全国に広まること、そして自ら工夫した方法を以て、南家のような支援者にもさらにさらに力を尽くしてもらいたいと堂々と御願いを申し入れているのである。

書状―6 外護者の動き

此処に納められている河川書簡は主文が切断され、後付け部分のみ残された。内容は全く推測のしようもない。たまたま同一の封筒内に残された南文蔵の活動がみられるいくつかの資料を此処に再現して参考に供したい。

書簡(6-1)

御挨拶まで 如是二御座候也

昭和十二年一月廿六日

河口 慧海

南文蔵殿 梧下

書簡(6-2) (郵便はがき)

宛先 神奈川県鎌倉町大町 妙本寺門前 南文蔵殿

切手消印 静岡・伊東11・8・14后8-12

発信人 伊豆国伊東町竹影荘 山本安三郎 八月十四日

一兩日来又々暑氣加り候折柄 皆様ご無事に候や貴臺にハ相変わらずご多忙のご様子何とぞ残暑厳しき折御自愛に相成り御無理なさらぬよう祈上げ候

当地一ヶ月間も雨無くこの間一二回埃押さへの小雨ありしのみ乾燥甚しく日々急雨を待ち居り申候 皆様へよろしく願ひ上げ候

書簡(6-3) 用紙 和紙小切れ

宛先 不詳(6-2はがきに対する返事下書きか)

発信人 南文蔵氏?

昨日御手紙頂き有難存じその後存じながらの御無沙汰致し居候 昨今殊(の)外暑さ厳しく如何に御過ごしなされ候かと御噂申居候処御手紙頂き

河口慧海著『正眞佛教』直筆原稿について

御壮健の御様子に拝し安度致し候 拙宅一同丈夫に過ごし居り候間御放念下され度伊東宅も何かとお世話様相成居り一寸見回りがたかた二十日頃参り度手筈成居候 前日お電話にて御願ひ申候(に)付宜しく御願上候 河口師あかくらより書状下され候 正眞佛教出版出来の御案内を受け同時に御贈呈下され候新本を賜り只今落手致し自から頭下がる思い致し候 是も一編に貴兄の御指導に依る賜物に正しき佛言たるを思ふ時き正しき教を世に送り出す事の嬉しさ御一慶至り相候(以下未完)

書簡(6-4) 用紙 和紙小切れ

書簡(6-3)の第一回の下書きか。(内容はほぼ同じである為省略)

書簡(6-5) (同封) 出荷案内書 1通

正眞佛教 員数8

著者「河口慧海様の御申付により御送附申し候

右之通り出荷仕候也 昭和11年8月20日

東京市神田區駿河臺二丁目十番地

圖書出版 古今書院

振替東京三五四〇番

電話神田(25)三七五三

南文蔵様

(参考) 角封筒書簡二通

角封筒入り各種案内(7-1)

河口慧海著『正眞佛教』直筆原稿について

二四二

宛名 鎌倉町妙本寺前 南文蔵様

発信 河口慧海師蔵和辞典編纂後援会

七 まとめ

(1) 小冊子「蔵和辞典編纂について 發願主河口慧海」

(2) 二つ折り「浄財喜捨願」(以上本文省略)

(3) 郵便はがき

表 東京都本郷区根津宮永町一九津谷宇之助殿

裏 御喜捨金額 御支払方法

(當方ヨリ集金郵便ニテ頂戴可仕候)

角封筒入り各種案内(7-2)

宛名 神奈川県鎌倉町妙本寺 南文蔵様

消印 11・4・8 后4-8

発信人 東京市世田谷区代田一丁目六三ノ十一号(小田急中

原駅下車) 在家佛教修行團

河 口 慧 海

(1) 三花祭案内状

(2) 三花祭祝詞(後付けに「勝手ながらこの祝辞を以て年賀には欠

礼致します」とあり)

(3) 三花祭執行目次(二つ折り)

(4) A3版用紙 二段組折りたたみ

上段 四月十五日三花祭日を以て祝日とすることの辯

下段 謹んで釈尊御誕生の年月日を訂正す

(ともに本文省略)

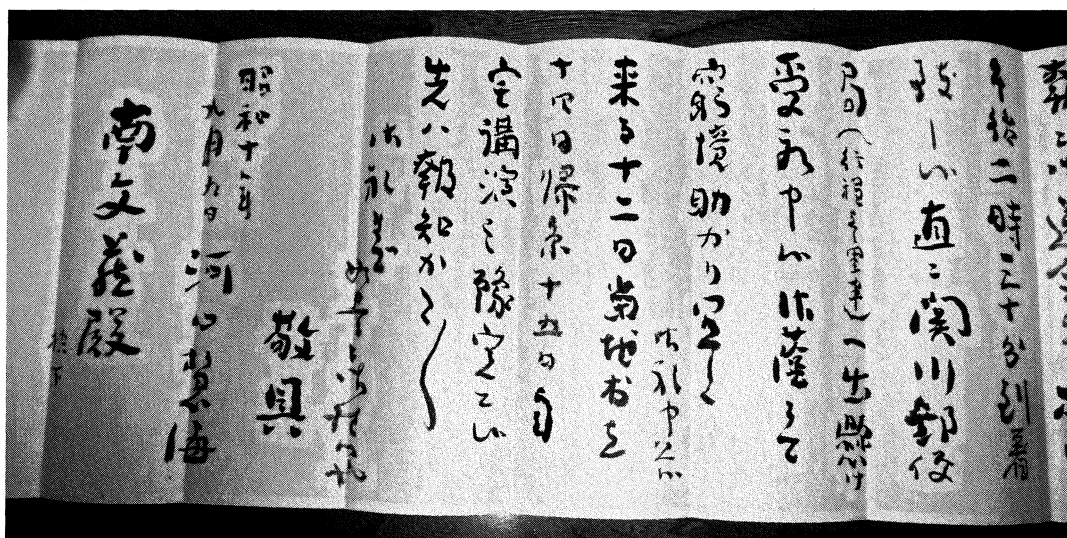
以上で小山田知子さんから紹介され、南家一家が大事に保存してきた河口慧海著『正眞佛教』に関わる筆写「原稿」こそ河口の自筆であり、特別に南家に謝礼の意味を込めて贈呈されたものであることが明らかになった。また、残された書簡類で『正眞佛教』著作及び発刊の経過が明らかになり、しかも、その後も手厚く支援を続けた南家の姿勢も判明した。

本年十月三日、小山田家に二回目の訪問をした。当日は南文蔵氏の長女南めぐりさん・南幸治氏ご夫妻の長男南一男氏が同席された。河口原稿については南一男氏の手になねられているとのこと。終始和やかで謙虚なご一家から、河口の原稿及び書簡類を東洋大学図書館に寄贈し、後学の役に立つことを熱望された。最後には、河口が筆写した在家仏教徒に与える「三学」(戒学・定学・慧学)の書が桐箱に収められ南家に複数保存されており、その内一つは、これも本学に寄贈を受けたのであるが、河口のひたすらな求道心と南家の関わりが話題となり尽きることがなかった。その「三学」末尾には「昭和八年一月十五日 伊東一草亭寓」とある。河口がお世話になった伊東の別荘の雅称が一草亭であったであろう。次いで同一二月五日本学図書館薄木三生副館長・池上正男事務部長と共に三回目の訪問をし正式に東洋大学図書館に寄贈される旨の手続きが完了した。南家一家と本件を紹介下さった小山田知子さんに感謝を捧げます。

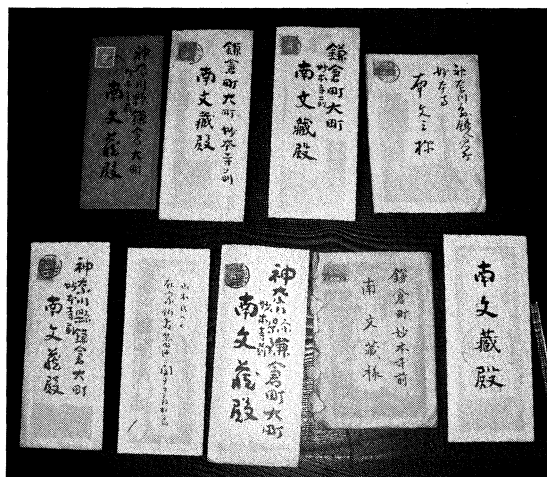
(平成二二年二月七日記)



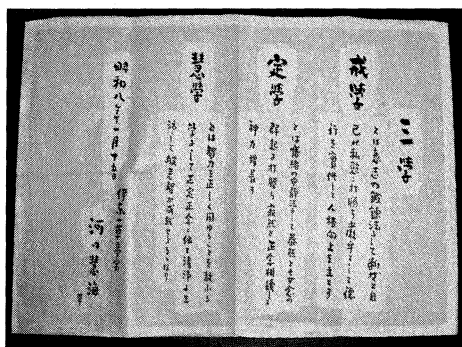
『正真佛教』河口慧海直筆原稿



南文蔵氏宛河口慧海直筆書状



南文蔵氏宛河口慧海直筆書状



「三学」の書